



日本のエンタメも惰眠を貪つていられない

国際ジャーナリスト
戸田光太郎

超ド級の衝撃力を持つ ディズニーのフォックス買収

猫の目のように変わる主戦場
米本国では、ディズニーによるフォックス買収が日本とは比べものにならないほど、遙かに大きなニュースとなっているが、それはなぜか？
この買収劇は大きく分けて、
①コンテンツのディストリビューション革命からの観点
②映画産業の構造変化からの観点
③コンテンツの組み換えに伴う観客からの観点
という、3つの観点から注目されている。

まず、①のディストリビューションの観点から。米国では映画も含めた番組コンテンツを視聴者に届ける方法が、当然、当初はテレビ受像機のみだった。米国でのテレビ放送開始は非常に早く1941年だった。広大な国土のために1950年代末には早くもケーブル・テレビが出現

CBSの、いわゆる三大ネットワークリークの時代が続く。

この間、どんどんテレビは力をつけて、凌駕するようになり、ハリウッドは衰退した。時代背景もベトナム戦争の泥沼化で、明るいハッピーエンディング、天真爛漫な映画は姿を消し、主人公が死んでしまうようなアンチ・クライマックスのニュースが目立った。それと同時に、1970年代が終わりを告げると地上波3代ネットワーク一強時代は終焉し、ケーブル・テレビのMTVやCNN、HBOと多チャンネル時代に突入した。ビデオ後にDVDのレンタル・チケットのブロックバスターが全米を席巻したのも1980年代半ば～19

しているが、主流はABC、NBC、

ABCはディズニーに、NBCはGE

を経て通信会社のコムキャストにそ

れぞれ買収された。

この間、ブロックバスターのよう

なビデオやDVDのレンタル企業は衰

退して行き、ストリーミングで動画

を見せる配信動画の企業、ネットフ

リックスやHulu、アマゾン・プライ

ムビデオに取って代わられて来た。

そしてケーブル・テレビは現在も解約が続いていることから、時代はネット配信への投資を拡大し、この全米中にあつたブロックバスターの店舗は一気に消滅、会社も倒産した。

そこでケーブル・テレビは現在も解約が続いていることから、時代はネット配信への投資を拡大し、このネット配信分野での圧倒的な勝利を目指している。

さて次に、②映画産業の改変という観点。6大映画会社で最も古いパラマウントは、1990年代にCBSと前後してヴァイアコム傘下に入った。ディズニーは傘下のABCとフォックスがHeinzの株を保有しているため、ネット配信業界をある程度牛耳ることができるわけだが、さらにディズニー独自のストリーミング・サービスを2019年に立上げると発表。しかも、ネットフリックスより安価

な月額で殴り込むと言っている。劇場映画の客を奪つた地上波テレビはケーブルと戦いつつ、ビデオやDVDレンタル会社と熾烈に争い、遂にネット上のストリーミングへと戦場を変えて来ており、ディズニーは、T勢力の攻勢に対抗するため、ネット動画配信への投資を拡大し、このネット配信分野での圧倒的な勝利を目指している。



フォックス買収でさらに強力になるディズニー

1つだった。ハリウッドは5大映画会社となつたのである。しかも、次に見ると、まさに1位と3位が組んだ格好となる。

●1位・ディズニー
●2位・ワーナー
●3位・フォックス
●4位・ユニバーサル
●5位・ソニー
●6位・パラマウント

26・3%
16・7%
12・9%
12・4%
8・0%
7・7%

ディズニーは買収合意の一環で、フォックスの負債137億ドル（約1兆5400億円）を引き受けるため、買収総額は660億ドル（約7兆4000億円）を超える。ディズニーが買収するのは、フォックスの映画、テレビ番組制作、娯楽関連ケーブル・ネットワーク、海外テレビ事業。

ワーナー・ブラザーズは1990年代に息盛んだったCNNのターナーの傘下に入るが、2000年には AOLにタイム・ワーナーとして買収された後、2002年のITバブル崩壊で再びタイム・ワーナーとして吐き出された。

ソニー・ピクチャーズはコカコーラからスピンオフしたコロンビア・ピクチャーをソニーが1980年代に買い上げたもので、低迷していくが1990年代後半から甦った。今回ディズニーに買収されることになった21世紀フォックスは、ハリウッドにある6つのメジャースタジオの

買収は株式交換を通じ実施し、フォックスは株主は1株当たりディズニー1株0・2745株を受け取る。M&A手続き完了後、フォックスの株主はディズニー1株の約25%を保有することになる。映画は水もので、巨費を投じたからと言ってヒットするものでもなく、ギャンブル性が高い。だからこそ投資家は、メガヒットしそうな「実績のある」シリーズものを好む。今回の買収劇は人気シリーズの獲得という側面がある。

気になるコンテンツ独占の弊害

最後の③だが、我々観客はどう受け止めたらいいのか。ディズニーが一部買収した21世紀フォックス（20世紀フォックスの親会社）は、フォックスのエンターテインメント部門である。映画製作・配給会社の「20世紀フォックス」と、ドラマ製作会社の「20世紀フォックステレビジョン」、「フォックス21テレビジョンスタジオ」だけでなく、さらにケーブルTV局など、エンタメ部門を掌中に収めたことになる。

映画では「紳士は金髪がお好き」「王様と私」「イヴの縁」「サウンド・オブ・ミュージック」「明日に向かって撃て!」「猿の惑星」「ダイ

ンハード」「タイタニック」など無数の名作群の権利が、ディズニーに渡る。加えてフォックスはアメコミ「マーベル」の「スター・バーニー」作品、「アバター」、「テッド・ブル」の他、人気テレビ番組「モダン・ファミリー」や「ザ・シンプソンズ」などのメガヒット作を持つ。

テレビではフォックスの米国の有料放送番組「FX」や「ナショナルジオグラフィック」チャンネル、地域のスポーツ放送網も手に入れれる。また、メディア会社「スター・インディア」やフォックスが持つ衛星テレビ局「スカイ」や「タタ・スカイ」の株式を得て、海外事業を拡大する。しかし、懸念はフォックスの低予算レベル「サーキュライト」の作る「ブラック・スwan」「バードマン」「スマッシュ\$ミリオニア」のような良質の企画に、ディズニー首脳陣がゴーサインを出さなくなるのではない。かということだ。我々は、王子とお姫様と、「何とかマン」ばかりの映画ではなくて、大人の鑑賞に耐えるヒューマン・ドラマが観たいのである。さもなくば「わが谷は緑なりき」を産んだフォックスの伝統は、ここで途絶えることになる。